

言葉を発明したヒトは神と光を見出して人になったのに……

前号で触れた「暗くて何も見えない」場所で捜しものをしている人は、暗闇で言葉というものにはじめて手を差し伸べようとする人類最初の人のイメージをかたちづくっている。言葉というものを知らなかったヒトは、「暗くて何も見えない」場所で何百万年ものあいだ、息を殺して暮らしてきた。自分たちが蹲っている場所が「暗くて何も見えない」世界であることを、ヒトは当然知らなかった。それ以外の世界を知らなかったからだ。そのとき、同じ「暗くて何も見えない」場所で蹲っている他の動物とヒトが異なっていたとすれば、動物が「暗くて何も見えない」世界に適応して収まっていたのに対して、ヒトはその世界に適応しない、いや、動物としての無能故に適応できなかった部分の中で、なにかを探しつづけていた点にあったはずである。

なにを探しているかはわからないまま、ヒトは探しつづけてきた。この「探しつづけるヒト」のイメージを人類が根底にかかえこんで、はるかな道を歩んできたことをけっして忘れてはならない。探しているうちにヒトは「探す習性」を身につけるようになった。その習性の中でヒトは「暗くて何も見えない」世界について光を見出して、自分たちがこれまで「暗くて何も見えない」世界に蹲ってきたことが見えるようになったのだ。自分たちが存在してきた場所の暗さというものに気づくようになったのである。

この光の世界でヒトは、自分たちの存在を超越する神と名づける以外にないものの存在をはっきりと意識するようになった。光の世界に神を見出したとき、ヒトはその光の世界に住むために、神とともに生きていることを実感しようとしはじめた。ヒトにとって光は言葉とともにやってきた。光の中に言葉が宿り、言葉の中に光が宿っていた。ヒトは言葉の中で神とつながろうとした。そのとき、ヒトは「暗くて何も見えない」世界から抜けだしてきた人になった。他の動物と自分を区別するようになったのである。しかし、言葉を覚えて光の世界に手を差し伸べて生きることになったとき、人は「暗くて何も見えない」世界を自分の中にかかえこんで生きねばならなくなった。自分の中の「暗くて何も見えない」世界から言葉を一つ一つ手探りで取り出してくる存在になった。光は暗闇の中でこそ輝き、暗闇は光の外でこそ暗闇であることを、人として理解するようになったのである。

言葉を介するヒトから人への進化は、メアリアン・ウルフ『ブルーストとイカ』で追求されている認知神経科学の脳の発達の観点からすれば、言葉に出会う以前の人間の脳は言葉に対応する仕組みになっていなかったが、言葉を文字として読むことになったとき、脳は《文字を読むために自らを再編成》する方向に切り替え、《その過程で新しい思考を形成していくという、奇跡に近い》能力を発揮するようになった。ヒトは言葉を持たなければ、他の動物と同じように、言葉を持たないままの「暗くて何も見えない」世界にありつづけた。言葉を持ったことによって、ヒトの脳は言葉を受け入れる脳へと変換しはじめ、人の脳として発達することになった。

著者がこの論考をまとめるきっかけとなったのは、《文字文化から、よりデジタルで視覚的な文化への移行》という、新たなコミュニケーション様式へと社会が移行しつつある極めて重大な問題が、これまでの文字脳にどのような決定的な影響をもたらすのか、を研究者として見通す必要性を感じたからであり、したがってそこで繰り返し強調されていることは、《人間の知能の発達に、読む行為ほど、当たり前のこととってはいけないものはない》ということである。言葉の問題としていえば、人間が言葉で話したり、言葉を読んだり書いたりすることを、《当たり前のこととってはいけないものはない》ということになるだろう。

言葉がはじめてヒトの頭上に降りそそいだとき、言葉は「暗くて何も見えない」世界の中で光であり、言葉の中で神とつながろうとした、という言葉の本質は、何年経とうと、何千年、何万年積み重なろうと、いまこの現存を貫いていくことにおいて変わりはないはずである。ヒトは言葉の中で人に成ろうとしたという歴史的な事実の前に立つなら、言葉に対して《当たり前のこととっては》いい

はずのことはなにもない。にもかかわらず、いま私たちは言葉に対して人類の祖先が抱いてきたような、それなくしては一ミリも前に進めないと感じる畏怖の感情は持ちえなくなっている。言葉の中で何度でも甦りを味わうという、奇跡的な体験からもはるか遠くに隔たってしまうている。言葉を育てていく関係を失っているだけでなく、言葉の中で育てられていく関係も深く失っているのだ。

言葉はいまや、単語として辞書の中に整然と並列されて、かさばる物体に詰め込まれているかのように見える。辞書の物理的な重さは単語の重さではもちろんなく、まして言葉の重さはそのには微塵もない。にもかかわらず、言葉は辞書ほどの重さもなくなっているといわざるをえなくなっている。辞書に盛られている単語をピンでつまみ上げて一つ一つ適当に並べていけば、文章らしきものが勝手に出来上がっていくというのが、言葉と私たちの関係になってしまっている。言葉はいつでもそこに転がっているという感覚に狎れてしまえば、そこにある言葉をつまみ上げる気力すら起こらなくなってくる、というのが言葉の現状であろう。

原初において「暗くて何も見えない」場所で探しつづけるなかから掴み取ってきた言葉は、いまも「暗くて何も見えない」場所で輝いている。何万年経とうと、そのことに全く変わりはない。原初の人類とその後の私たちが異なっているのは、彼らには自分たちが探しつづけているものがなんであるのかがわからなかったのに対して、私たちは自分たちが探しつづけているものを知っていることである。その大きな違いがあるにもかかわらず、原初の人類と私たちは言葉でつながっているのではなく、「暗くて何も見えない」場所で探しつづける行為において、深くつながっているのである。彼らが私たちに託したのは、単なる言葉ではなく、「暗くて何も見えない」場所で探しつづけるなかから掴み取ってくる言葉であることを忘れるなら、もはや私たちは原初の生命の運動というものから断たれていくことになる。

本当は私たちも原初の人類と同様に、「暗くて何も見えない」場所で探しつづけるなかから掴み取ってくるものについては、なにも知らないかもしれない。彼らと違って、言葉を掴み取ってくることにについては知っているけれども、その言葉がなにでできているかについてはまだなにも知らないのである。原初の人類が掴んだものが言葉であっても、本当に探しつづけていたものはなにかの言葉ではなく、言葉のなにかであったかもわからないように、私たちだって「暗くて何も見えない」場所で言葉を探しつづけているように見えながら、言葉というものにあらわされている、まだ私たちにも明らかになっていないなにか、言葉に秘められている、言葉を突き抜けていくなにか、に手を差し伸べているのではないだろうか。

言葉を失いつつあるのではない。「暗くて何も見えない」場所で言葉を探しつづける姿を失いつつあるのである。「暗くて何も見えない」場所から言葉を掴み取ってこざるをえない関係を失いつつあるのだ。言葉の向こうの関係へ向かわなくてはならないのに、言葉の壁の前で打ち崩れようとしているのではないか。私たちは言葉を駆使して自分の考えを言いあらわそうとしてきたが、言葉自体が語り出そうとするのを押し殺してきたために、言葉を手段とするなかで言葉の奔放な命は失われてしまっているのを感じる。思考の道具化と商品化によって、言葉が散々な目に遭い、貶められているとしても、言葉を発する人間そのものが息が詰まる社会の関係の中に立たされつづけているなら、同様に呼吸困難に陥っている言葉だけを直立させようとするのは倒錯にほかならない。

「暗くて何も見えない」場所で言葉を探しつづける姿は、人間と言葉がつながっていなければならない関係を明示している。「暗くて何も見えない」場所を私たちが一人一人奥深くかかえて生き、その場所からそうしようと望めば尽きることなく言葉を掘り起こすことができることにおいて、言葉の中にいつも自分が見え隠れしている。しかし、私たちが自分の中のその場所に降りて行かず、自分の外に転がっている言葉で間に合わせようとするなら、言葉は空虚な意味を帯びた音として素通りして行くだけである。あるいは、自分と自分の言葉が出版流通プロセスに分断されて、思考が引き出されていくのとは反対に、思考が圧殺されていく活字として読み手を抑圧して行くだけである。人間と言葉が断ち切られないように生きつづけることが、つまり、人間と言葉が共に生きられる関係をつくり出すことが、私たちと私たちの言葉に切迫して問われていることなのだ。